

要 旨

現在の石川県では、公文書館は設置されていないが、令和 3 年度中の完成を予定している新石川県立図書館に、公文書館機能が備わる。県立図書館が所蔵する、国絵図や境絵図、地籍図、家文書等の歴史・郷土資料に、県庁が保管している歴史的公文書が加わることで、来館者に一体的な資料提供を行うこととなる。

公文書館機能を備える図書館として、特筆すべき資料はないかと考えたとき、新コレクションの目玉として収集している「工芸図案」に着目した。明治から昭和初期、国を挙げての工芸振興期に石川県の諸機関が発行した図案は、歴史資料であり、公文書でもあるのではないかと、という考えを持ったためである。

石川県にとって「伝統工芸」は、明治から現代まで引き継がれる主要産業のひとつであり、県のブランドイメージや観光を支える資源でもある。背景には、江戸時代以降の加賀前田藩の工芸振興がある。三代藩主・前田利常は城内に御細工所を開き、京都と江戸から名工を指導者として招いて、藩主用の工芸職人を養成した。しかし明治 4 年の幕藩体制崩壊後、他の藩同様、加賀藩お抱えの職人たちも、多くが職を失うこととなった。その頃に動き出したのが、欧米諸国に追いつこうと殖産興業を推進した明治政府である。工芸品は、輸出振興において重要な品目であった。本論文で取り上げる「工芸図案」は、以上のように明治以降の政府が主導した工芸振興から発生したものである。

本研究論文では、まず 1 章で、先述したような明治政府による工芸振興と、全国での工芸振興に関わる動き、そして石川県における動きを捉える。2 章では、石川県における図案指導がどのように始まり、どのような組織や人物が関わったのかを紐解き、図案指導の変遷を分析する。そして 3 章では、新コレクションの目玉として収集した「工芸図案」を紹介する。4 章では、その「工芸図案」をデジタルアーカイブで公開することで、窓口業務と同様に一体的な情報提供を実現する方法、さらに、オープンデータ化によって、新たな創造を生み出していく方法を検討する。

本論文で、「工芸図案」を通し、公文書館機能を備える新石川県立図書館が持つ特色を考察することで、そこから見えてくる課題を捉え、開館に備えたい。